鷹の目の狩人 XVIII

小さな美の巨人 紙の宝石たち

しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原　道晴

地図コレクションを始めて相当経った頃、今も毎月活躍されている東京古地図倶楽部に入れていただいた。江戸東京、道中図、地図鳥瞰図錦絵、吉田初三郎、絵葉書、博覧会、都市、欧版日本地図、中国台湾朝鮮、城郭とあらゆる分野の地図コレクターが集まり、建築家、学校、図書館、公務員、駐在員等職は様々だが、展示会見学、図書館視察、資料査定、地図交換会、講演会と地図好きの会合に安らぎを覚えていた。

ある時、地図切手の収集家を講師としてお招きした。メンバーに地図切手のコレクターはさすがにいなかった。普段、大きな地図を部屋いっぱいに広げて見ている状況であるので、切手を持参されて現物を前にして受けた際の衝撃は計り知れなかった。その方は『地図の宝石』と呼ばれた。誠に繊細、華麗、美しい。地図だけ見ていれば満足な人たちの集まりである。地図は何十年も見尽くしていたが、これ程かわいい地図は見たことがない。たちまち虜になった。殆どは外貨稼ぎのための諸外国の切手であり、それほど古いわけでもなく、今でもおそらく切手商や古銭商で入手できると思われる。数年は都内の切手商で探し回り、集め廻った。売るための洗練された切手、使うためでない、労働を伴わず純利益となる記念切手であるが、日本の切手のデザインはまだまだ見劣りがする。使われずに秘蔵され、国益になる切手であれば、もっと制作に時間と金をかけ、美しく、楽しいものであってほしい。

切手は古い貴重なものを除き、殆どは骨董とは言えず、換金されているが、骨董市場は奥が深い。何でもある。大海で埋蔵金を探すようなものである。あるとき、『紙の宝石』に出くわした。燐票、つまり、マッチラベルと蔵書票である。いずれも、まさに印刷の縮図、時代の最先端の技術を小さな世界に凝縮、閉じ込めている。錦絵や新版画の木版、繊細な銅版、コロタイプ、リトグラフ、シルクスクリーン、型染め、エンボスとまさに印刷の百貨店である。

大正昭和初期に隆盛を極めたこれらは、当時一流の前川千帆、徳力富吉郎、畦地梅太郎、川西 英、恩地孝四郎、川上澄生、橋本興家、棟方志功、関野準一郎、芹沢銈介等であり、燐票は蔵書家が作家に依頼して作らせた。まさに芸術作品であり、紙の宝石と云われる所以である。燐票の作成も記念の度に企画されたようで、手元にある木版燐票だけでも、昭和 6 年 11 月大阪城天守閣再築記念、大楠公 600 年記念、全国城画志全 60 枚、広告尽 68 枚、水郷十景、役者絵、現代女姿 14 枚、香道 54 枚、絵馬 20 枚、名所巡り 100 枚、高射砲 19 枚、古代文様集 66 枚、浄瑠璃 20 枚、灘の名酒 22 枚、纏（まとい）26 枚、刈萱（かるかや）と石童丸 42 枚、神戸港まつり 16 枚、神田八景、勅題（ちょくだい）の歴史 93 枚、名所江戸百景 100 枚、東都辰巳八景、滝十二景、東海道五十三次 57 枚、国旗 56 枚、日本全国都市章 165 枚、狂歌国芳 24 枚、門芸（大道芸）48 枚とあらゆるテーマで楽しんでいる。これらはいずれも 4×6cm の小片に木版で印刷されている。大正ロマンを感じさせるゆとりの世界である。

燐票全国城画志の一部

大正ロマンというと、京都三条新京極のさくら井屋が惜しむらく 2011 年 1 月閉店したという。骨董の世界でその名を知らない方はいない。絵封筒、ポチ袋、便箋の工房であるが、実にかわゆい、女性ファンはひっきりなしである。洗練されたデザインは他社のものと数段違う。木版で作成された小片の袋は味わいと余韻を残してくれる。便利堂といい京都は日本のふるさとである。其の外、納札、小林カイチや夢二の絵葉書も捨てがたい、小粒でもピリリと辛い。

人生も、いつも、光り輝く紙の宝石のようでありたいと思う。

さくら井屋のポチ袋

地図切手